

サーサナ

第65号 仏暦2567 (西暦2024) 年10月11日

大般涅槃經に学ぶ (2)

『大般涅槃經』の大切な教えの第二は、自己に関するものです。第35節では次のように釈尊が弟子の阿難に語ります。

「そなたたちは、自己を島とし、自己を拠り所とし、他を拠り所とせず、法を島とし、法を拠り所とし、他を拠り所とせず、住みなさい。」

ここに「島」というのはどういうことかといいますと、インドではガンジス河やヤムナー河のような大河が滔々と流れているわけですが、雨季ともなれば水量が増して、下手をすると人も動物も流されてしまいかねないのです。そのような場合、頼りになるのは河の中洲です。いわば緊急避難場所、これを「島」と表現しています。ただ、これはインドに住んでいないと分かりにくいので、漢訳するときに、「島」の代わりに「灯明」と置き換えられました。すなわち、暗闇で頼りになるのが光ですから、これをもって拠り所の象徴としたわけです。

また、「法」という語はさまざまな意味を持ちますが、ここでは「真実・真理」ということです。

そこで、日本などの大乘仏教圏では、上記のことばを短くして「自灯明 法灯明」と表現することがあります。「自己と真理とを拠り所にせよ。他人や真理でないものを拠り所にしてはならない。」これについての詳細は、本紙61号 (昨年9月) に書きましたので、繰り返しません。

第三には「諸行無常」があります。「今やそなたたちに告げます。『いかなるものも移ろい行きます。怠ることなく努めなさい』と。」

この言葉を最後として釈尊は入滅されます。これはいわば釈尊のいちばん大切な遺言なのです。釈尊は弟子たちに数多の教導をされ、「師に握拳なし」と言われるように、あたかも拳の中に握って隠しておくような秘密というようなものはなく、自らが体得したすべてを語り尽くしたことを、弟子たちに確認した上で、この遺言を発せられたのです。

私たちは「諸行無常」という理（ことわり）を、あまりにも情緒的にとらえずいでいるのではないのでしょうか。その証拠に、「無常カン」の「カン」は漢字でどう書きますか、と尋ねると、多くの方は「無常感」と書くのです。しかしこれは誤りで、「無常観」なのです。これについても、本紙58号（一昨年12月）で書きましたので、再読していただければ、と思います。

最後に余談なのですが、釈尊の入滅は80歳の時であった、と伝えられています。当時としては驚異的な高齢です。自らの体力の限界を感じ、余命が長くはないことを悟っていたと思います。「私は老境に達し、譬えば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いて行くように、私の身体も革紐のたすけによってかろうじてもっているようなものだ」と感慨を述べるのですが、その後、チュンダという在家信者の家でとった食事が原因で激しい腹痛に襲われます。食中毒だったのでしょうか。その食事内容は「スーカラ・マツダヴァ」と書かれています。これは「野ブタの肉」なのか「ブタの好むようなキノコ（トリュフ?）」なのか、解釈が分かれています。初期仏教では菜食主義をとっていませんので、自らのために肉料理を要求することはないのですが、托鉢で生きている以上、在家信者から提供された食べ物を、肉だからといって拒否はできないのです。宮沢賢治は『ビジテリアン大祭』という作品の中で、厳格な菜食主義（ビーガン）が理想であることを主張しながら、「釈尊が食中毒になったのは豚肉ではなくキノコである」といっています。しかしながら歴史的には、やはり仏教＝菜食主義と考えるのは無理があるように思います。



永代経懇志お礼

下記のとおり永代経懇志を頂戴いたしました。ここにあらためてお礼申し上げますと共に、今後とも法義相続されますことを願いたします。

6月16日	筒井様[緑区東神の倉]	200万円
9月7日	西川様[緑区亀が洞]	10万円
9月29日	伊藤様[天白区境根町]	60万円

法要行事について

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。



十月 報恩講（ほうおんこう）

報恩講とは、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人（1173-1262）の祥月命日（11月28日）にあたって、その前後に勤められる法要です。親鸞聖人が亡くなられた日に仏法を聴く集いを開いて、自らの信仰を確かめ学び直そうという人たちが集まりました。この集いを「講」といいます。そして、和讃に「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」とうたわれるように、仏祖への報恩謝徳の集いでもあります。

- ❖日 時 10月29日（火）午前10時～午後3時
- ❖内 容 午前：勤行（文類偈・念仏讃・回向）、御俗姓拝読、法話
午後：勤行（正信偈・念仏讃・回向）、法話
- ❖持ち物 勤行本『報恩講勤行テキスト』
- ❖法 話 前田和丸師（一心寺前住職）
- ❖記念品 法語カレンダー、教化施本ほか

十二月 成道会（じょうどうえ）

約2500年前、北インドでお釈迦様がさとりを開かれ仏陀となりました。12月8日、35歳のときであったと伝えられています。お釈迦様のさとりから仏教は始まりました。私たち仏教徒にとって最も神聖な記念日です。

- ❖日 時 12月8日（日）午後1時～2時半【午後0時半から受付】
- ❖内 容 勤行（和文仏教聖典読誦・正信偈同朋奉讃）・法話
- ❖持ち物 『和文仏教聖典』『正信偈同朋奉讃』（または『真宗大谷派勤行集』）
- ❖法 話 当寺住職

十二月 門徒総会

上記の法要に引き続き、門徒総会を開催します。年間の活動報告をし、皆様からのご意見をうかがいます。

おみがき奉仕

本堂の仏具を研磨します。汚れてもよい服装でおいでください。

❖10月14日（火）午前9時～11時（終了時間は多少前後します）

//第54回名古屋市仏教徒大会//

日時	11月5日（火）午後1時開会（開場は正午）
場所	東別院会館ホール
主催	名古屋市仏教会
参加	無料（ただし先着450名まで）
内容	式典および和太鼓コンサート（山田純平×熱響打楽=>QRコード参照）



※粗品引換券が3枚当寺にあります。ご希望の方に差し上げます。

生活の中の仏教用語（2）

我慢

一般的には「耐え忍ぶ」「辛抱」という、良い意味で使われることが多いのですが、これは仏教用語の転用です。自分を高く見て他を軽視する思い上がりの心を「慢」といいます。サンスクリット語の māna を漢訳したものです。煩惱のひとつにかぞえられます。ですから我慢も自慢もほぼ同じ意味だといえるのですが、自慢というときには自分が威張っているという自覚がありますが、我慢の方にはそれがありません。我慢は、意識せずに自分と他者を比較して自分の方がすぐれていると思ひこむことです。無自覚なのです。「がんばる」というのも同じことで、本来「我をはる」＝「自己に驕り高ぶる」ことだったのに、いつのまにかそれが良い意味になってしまいました。

仏教的な生き方とは、我慢しないこと、がんばらないことだといえるでしょう。

真宗大谷派 教心寺（名古屋教区第30組）

編集発行人 釋眞弍（山口眞一）

468-0026 名古屋市天白区土原3丁目205番地

電話：801-1381 電子メール：kyosin@nagoya30.net

URL <http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/>
